

第5回：理想の家(住み家)とは。

前回までのこのコーナーもタイトルも新たらしくなつてちょっと模様替えです。さて、家に求める要望は十人十色です。構造？ 性能？ デザイン？ コスト？ ここでは書ききれないほど多くの夢や希望を家に求めていることでしょう。そこで今回は、そもそも人にとって家とは？ そして現代の社会に、環境に適している家とは何かを解説させていただきます。

解説◎山本康彦
取材協力◎株式会社ワイズ

山本康彦の

自然のチカラ、
住まいの素材

本当の建築誌

人類と住み家のはじまりは 竪穴式住居。

太古の昔、人類は他の生物と同様に住み家(家)を持たず、大地や洞穴や木や岩陰などで暮らしていました。やがて人類は石器を用いて、狩猟、植物採取、植物栽培、漁労などを行い、集団(共同体)で生きていく中で、社会や秩序を構築し、定住を行う事



竪穴式住居

になります。そのことから人間は、『家』(竪穴式住居)を作り、住まい、洞窟(横穴)の生活から変化していきました。この竪穴式住居は、二万年以上もの間、人々の暮らしを支えてきたと言われています。

竪穴式住居があらわれるのは、今からおよそ7000年くらい前の縄文時代早期の終わり頃で、その名のとおり、地面に深さ50〜80センチの穴を掘り、その底に床(ゆか)

をつくり、柱を立てて屋根を葺いた建物です。地面を掘り下げた底の深さは、地域や時期で異なるようで、極寒地の北海道の一部の地域では、長さが4〜10メートルもある汁鉢状の大きな穴で、深さが2・5メートルもあつたと言われています。

この竪穴式住居の居住性ですが、現代人の我々が思うより、ずっと快適であつただろうと最近の研究でも明らかになってきています。骨格や屋根は草木で造り、その上を土で覆う造りもあつたようです。床を地面より深く掘り下げている為、地熱の温度は安定しており、外気温よりも冬は暖かく、夏は涼しい。屋根を草木や土で覆っている為、断熱性も適度であり、高低湿度の際も調湿を行っていたと思います。中には調理や暖をとる為の『炬』があり、冬季の熱源として、火が発する輻射熱(遠赤外線)で土や木が蓄熱するなどしていたと想像できます。こうして、竪穴式住居は、日本の農家や民家のもととなっていました。

構造を木で造り、屋根は茅葺、壁や土間は土で造る…まさに日本の家の源ですね。

時代は、現代の家に近い 高床式へ。

弥生時代(一説には縄文時代晩期)には、日本各地でかつて狩猟を中心としていた生活から稲作(水稲耕作技術)をすることが広まっていきます。害虫や獣、水害から、それらの穀物を守り、風通しをよくするために床が高く造られ、稲やとうもろこし、小麦などを蓄える倉庫として、古くから日本

だけでなく、世界各地で用いられたようです。現在でも、アフリカ中央、南アジア、東南アジアに同様な建物が多く存在し、日本の正倉院などが高床式(校倉造)の建物になり、日本でも伊勢神宮などに代表される神社建築様式の1つである神明造はこれから発展したとされています。

古墳時代に入って、一部の豪族の住居としても用いられるようになった様ですが、多くの人々は高床には住まずに、あくまで倉庫として用い、あい変わらず竪穴式に住んでいたようです。高床住居は竪穴式と比



高床式倉庫

べ、開放的で夏向きにできているとの論説もあるようですが、私は竪穴式住居の方が日本の環境の場合、住まいには適していたからだと考えています。

高床式住居の場合、名の通り地面から床をあげる事により、夏場は比較的涼しく過ごせたと思いますが、地熱の恩恵を受ける事がなく、室内に炬も作れず、冬の寒さは相当厳しかったと思います。その為、床の上に畳を敷いたり、衣服を重ね着して寒さをしのぐしか方法がなかったのかも知れません。

高貴な方ほど、冬は寒く過ごし、民ほど快適な住まいで暮らしていたと考えると少し滑稽ですね。

古の住まいと現代の住まい。

日本で現在主流の家(木造在来工法)の造り方を見ると、造り方は高床式に近いと思われませんが、高床式に住み始めて1500年以上経った今、日本の家づくりは夏の暑さに耐え、冬の寒さに耐える工夫をしてみましたでしょうか？

屋根は藁(わら)や茅(かや)、瓦を使わずに、金属やセメント製の防水性に長けていない材料に移行してしまいました。水を吸わないこれらの材料は、太陽の熱ですぐに材自体の温度を吸収し温度をあげてしまいました。外壁も同様に土や木から樹脂混入の建材やセメント系、金属製の建材が多く、同じく水を吸わない性質の為、室内の温度をあげてしまいます。

壁の中にはいっばいに断熱材が入り風の通り道を塞ぎ、その断熱材自体が吸放湿性に劣る場合や、家自体をポリエチレンシートなど

で囲う次世代省エネルギー基準の高気密住宅の場合、気密性が良くなる半面風の通りが無く、外気温と室内の温度差が大きくなり、壁内外で結露が起きやすくなり、構造材である木が腐りやすくなってしまう。

余談ですが、最近流行の漆喰、珪藻土ですが、再三、樹脂入りの製品がほとんどでも自然素材とは言えないとの話をさせて頂きましたが、いくら仕上げ材が良くてもビニールシートで囲っている意味がありません。まるでカシミヤのセーターの下にラップを巻いて、暖かく、通気性も良いね、と言っているようなものです。

基礎を設ける事により、地震には強くなりましたが、床下の風通しが悪くなり、床下の湿気が溜り、木が腐りやすく、シロアリの被害が多くなってしまった。現代の住まいは、結果、暮らしにかかる消費エネルギーが3倍〜4倍にも増えたと言われています。日本の住環境は、戦後、70年余りです。それまでの伝統、伝承を無くしてしまっただとも言えるのです。

童話 三匹の子豚に学ぶ。

一番目の子豚はわらで家を建てるが、狼がわらの家を吹き飛ばしてしまふ。

二番目の子豚は木で家を建てるが、や



はり狼が木の家を吹き飛ばしてしまふ。

三番目の子豚はレンガで家を建てる。狼はいくら息を吹き付けても、レンガの家を吹き飛ばす事ができず、子豚達に懲らしめられてしまふ。

木やわらで簡単に家を造り、遊び呆けている兄弟と、コツコツと時間と労力をかけ、苦労しても良いものをつくれれば必ず最後は報われると言う教訓のヨーロッパの童話です。教訓はともかく、家だけに目を向けるとあくまでヨーロッパ(環境のお話なのです)。

こと日本の住まい(家)に当てはめるとそうではないのです。

日本(アジア)と比べて湿度が低いヨーロッパなどでは耐火、耐風性に富んだレンガ(石)の家が良いと思いますが、日本の場合、耐震性や断熱性、調湿性に問題があります。木やわらは、それらの性能に長けています。そして木やわらは、日本の気候の中で育み生み出していくことが可能な材でもあります。

わら、木、レンガ：材単体の強度の順でも言いましょうが、日本の住環境をみると材自体の強度とそれは一致しないと思います。

三匹の子豚の家に学ぶ私の考える、現代の家は、『構造は木で造り』『断熱性はわらを使い』『石(土)を床や壁に使い蓄熱をする』、これらの自然材を用いた家こそが、快適で健康な暮らしやすい家ではないでしょうか？

手間を掛ける事でコストも上がってしまいます。しかし、手間を掛けて造るものには必ずその根拠や役割があるのです。

簡単に、早く、安く、誰でも作れる家が現代の住まいになってしまいました。が弊害

も多いそれらの家。それがたはたして良い家なのでしょうか？

身近な自然素材で家を建てる。自分で維持、管理を行い、費用(ランニングコスト)を抑える。環境面、金銭的に無駄なコスト、エネルギーは使わない。家が健康なのは当たり前。家全体を密封せず、空気が流れる、呼吸する家を目指す。空調機器(エアコン)に頼らず、夏は涼しく、冬は暖かく。室内の音が響かず、静かで落ち着ける。本物の素材でできている家。

これらの考えで建てた家は、まるで堅穴式住居の住環境でもあるのです。まさに身近にあるものを用いて環境にも人にも優しく適している住み家(家)であると考えられます。(次号につづく)



解説/山本康彦◎1968年神奈川県鎌倉市生まれ。18歳から職人として30年近く湘南の地で家づくりに携わる。土を利用しての建材、版築製品の研究・開発、販売などに従事。一級建築士だけではなく、古民家鑑定士などの資格も30以上持っており、伝統的な構法や建材にも造詣が深い。近代の建材(新建材)や工法の矛盾や実害を肌で感じ、人が住まう家というものを原点から見つめ直す。エコブームに流されないパッシブで地域循環型の家づくりをめざし、未だにすべては解明されていない伝統的な工法や素材について研究や開発に余念がない。

取材協力

株式会社ワイズ

〒253-0021 神奈川県茅ヶ崎市浜竹3-4-64
TEL: 0467-88-3903 FAX: 0467-88-3907
URL: <http://www.ys-no1.co.jp>
mail: ys-no1@ys-no1.co.jp

